

執筆者紹介 (論文掲載順)

論文

- ① 橋 信雄 真言宗豊山派総合研究院宗学研究所主任研究員
 - ② 南 昌宏 高野山大学教授
 - ③ 土居 夏樹 高野山大学准教授
 - ④ 西 弥生 種智院大学人文学部仏教学科講師
 - ⑤ 新井 弘賢 真言宗豊山派総合研究院事相研究所研究員・大正大学総合仏教研究所研究員
 - ① 北村 太道 種智院大学名誉教授
 - ② 桜井 宗信 東北大学大学院文学研究科教授
 - ③ 種村 隆元 大正大学仏教学部准教授
 - ④ 仇 云波 種智院大学客員准教授
 - ⑤ 星野 壮(壮英) 大正大学文学部専任講師・真言宗豊山派総合研究院現代教化研究所研究員
 - ⑥ 徳重 弘志 高野山大学密教文化研究所専任研究員
 - ⑦ 松本 恒爾 智山伝法院囑託研究員
- 書評
- 徳重 弘志 前掲
 - 加藤 精純 大正大学仏教学部専任講師

日本密教学会役員名簿 (学会配列は五十音順)

理事長 榊 義孝

高野山同学会

(〒六四八〇二八〇 和歌山県伊都郡高野町高野山三八五)
 常任理事 乾 龍仁 理事 佐藤 隆彦
 理事 添田 隆昭 監事 奥山 直司

種智院大学密教学会

(〒六二一八二五六 京都府京都市伏見区向島西定請七〇)
 常任理事 北尾 隆心 理事 松本 峰哲
 理事 仲田 順和 監事 スダンシヤキヤ

智山勸学会

(〒一〇五〇〇〇二 東京都港区愛宕一三三八 眞福寺中)
 常任理事 元山 公寿 理事 種村 隆元
 理事 芙蓉 良英 監事 佐々木大樹

豊山学会

(〒一七〇一八四七〇 東京都豊島区西巢鴨三二二〇一)
 常任理事 野口 圭也 理事 堀内 規之
 理事 星野 英紀 監事 大塚 伸夫

事務局

事務局長 佐々木大樹 事務局員 別所 弘淳

平成 31 年 3 月 20 日 印刷
 平成 31 年 3 月 30 日 発行

密教学研究 第 51 号

編集兼発行者 榊 義孝
 印刷者 株式会社三陽社
 発行所 日本密教学会事務局
 東京都豊島区西巢鴨 3-20-1
 大正大学 真言学智山研究室内
 電話 03(3918)7311(代)

(製作 = 青史出版)

- 10) 同願は結果として同年11月22日に「内務大臣 原敬」名にて認可された。なお寄附金募集期間は当初は5年間を予定していたが、その後さらに3年間延長された(『新興』2(1))。
- 11) 『加持世界』によると、明治43(1910)年12月31日時点で真言宗豊山派の抱える講社は161を数えた(『加持世界』11(5))。ただし、すべてが長谷寺の講であったかどうかは明記されない。また明治45(1912)年4月5日に行われた長谷寺信徒大会には「各講社長、世話人、講社総取締等百余名を招待し」(『加持世界』12(5))とあることから、少なく見積もって100以上の講社が長谷寺信仰の講社であったと考えられようか。
- 12) なお『絵本山長谷寺略図大講堂及付属建物略図』が、江戸時代までに発行された諸々の長谷寺俯瞰図とどのような関係にあるかは、藤巻和宏氏が論じている(藤巻2018)。
- 13) 上棟式は牡丹が花咲く時期であり、かつ豊山初代能化である専譽僧正遷化の日が選ばれた(『加持世界』17(6))。
- 14) ただし、当時の長谷寺参詣者数などのデータは文献に残されておらず、未詳である。このような文献を発見・収集することも、今後の課題となるだろう。

〈キーワード〉 寺社参詣、長谷寺、鉄道

Guhyamañitilaka 第三章における五相成身観について

徳重弘志

はじめに

**Guhyamañitilaka* (*gSang ba nor bu thig le zhes bya ba'i mdo*)とは、チベット語訳(D no. 493; P no. 125)のみが現存する密教経典であり、その訳者はスガタシュリー(Sugataśrī; bDe bar gshegs pa'i dpal)とサキヤ・パンディタ(Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251)である。なお、同経典に対する注釈書については、存在が確認されていない。

さて、**Guhyamañitilaka* は五つの章から構成されている。それらのうち、第一章(1箇所)と第三章(2箇所)には、五相成身観が説かれている。先行研究¹⁾では、第一章における五相成身観についてのみ、検討が行われている。それらの研究では、当該の経典が成立した時期は、『真実撰経』と*Hevajratantra*との中間であると指摘されている。

以前に拙稿²⁾で指摘したように、**Guhyamañitilaka* の各章の末尾には経典名に関する記述が存在するのであるが、第一章とその他の章とでは経典名が異なっている。そのため、**Guhyamañitilaka* は、元々は成立基盤を異にする二つの独立した文献が後代に統合された経典である蓋然性が高い。ここで問題となるのは、同経典の第二章以降が、元々は第一章とは異なる経典であったとするならば、その成立時期はいつなのかという点である。

管見のおよぶ限りでは、**Guhyamañitilaka* の第一章から第三章までの内容は、『真実撰経』の第一章(金剛界品)と第二章(降三世品)の内容を踏襲しており、そのマンドラや儀礼も*Guhyasamājantra* や*Hevajratantra* といった本格的な後期密教経典の影響を受けているとは考え難い。また、プトウン(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)は、**Guhyamañitilaka* をヨーガタントラ階梯のうちの

「同分タントラ (cha mthun)」に分類している³⁾。これらのことから、* *Guhyamanitilaka* の第二章以降も、第一章と同様に、『真実撰経』と *Hevajratantra* との中間に成立したと推定できる。なお筆者は、* *Guhyamanitilaka* はヨーガタントラ階梯に分類される中期密教經典であると判断している⁴⁾。

ただし、* *Guhyamanitilaka* の第二章以降には、第一章の段階では見られない後期密教的な要素が頻出している。特に注目すべきなのは、第三章における五相成身観では、性的な要素が修法の中に組み込まれているという点である。そこで本稿では、同經典の第三章における五相成身観を検討することによって、中期密教から後期密教への過渡期における修法の変遷を解明する一助としたい。

1. *Guhyamanitilaka* 第三章における五相成身観

* *Guhyamanitilaka* 第三章 (D 135r6-149r5; P 96v1-111v7) は、①「降三世マンダラ」、②「母天たちの母音のマンダラ」、③「降三世明王の因縁譚」、④「マハーマーヤーの明呪と修法」、⑤「五相成身観」、という内容から構成されている。本稿で扱う五相成身観は、これらのうちの①と⑤に含まれている⁵⁾。

以前に拙稿⁶⁾で指摘したように、①における五相成身観は、第一章における五相成身観と同様に、マンダラの成就法の一分支として扱われている。これに対して、⑤における五相成身観は、マンダラとは関連付けられておらず、他の箇所よりも纏まった内容が説かれている。さらに、本稿の主眼である五相成身観における性的な要素に関しても、⑤に顕著に見られるため、本稿では当該箇所を中心として考察を進めて行きたい。

なお、⑤では、金剛手菩薩と大毘盧遮那如来による問答という形式で、五相成身観について扱われている。デルゲ版 (D) と北京版 (P) における当該箇所の所在は、以下の通りである。

【問答 01】 (D 145v3-5; P 107v7-108r3)、【問答 02】 (D 145v5-6; P 108r3-4)

【問答 03】 (D 145v6-146r3; P 108r4-8)、【問答 04】 (D 146r3-5; P 108r8-v2)

【五相成身観の説示】 (D 146r5-7; P 108v2-4)

【問答 05】 (D 146r7-v1; P 108v4-7)、【問答 06】 (D 146v1-4; P 108v7-109r2)

【問答 07】 (D 146v4-147r1; P 109r2-7)、【問答 08】 (D 147r1-3; P 109r7-v2)

【問答 09】 (D 147r3-148v2; P 109v2-111r3)、【問答 10】 (D 148v2-4; P 111r3-5)

【問答 11】 (D 148v4-6; P 111r5-8)、【問答 12】 (D 148v6-149r1; P 111r8-v2)

【問答 13】 (D 149r1-4; P 111v2-7)

さて、本稿では考察の前提として、「五相成身観の目的」について最初に言及する。その上で、性的な要素が顕著に見られることから、「五相成身観を行う状況」、「五相成身観の内容」、「女性への親近の必要性」といった項目について順に検討を行いたい。

2. 五相成身観の目的

* *Guhyamanitilaka* 第三章では、④「マハーマーヤーの明呪と修法」の末部に、「五相成身観の目的」について以下のように記されている⁷⁾。

ji ltar bshad pa'i las rnam byed do || rtag tu bzlas na 'chi ba las rgyal bar 'gyur ro || lag na rdo rje 'di dag ni sgyu 'phrul chen mo zhes bya ba'i rig pa sgrub pa'i thabs dang bcas pa ste | tshul 'di nyid kyis 'jig rten thams cad dbab par bya'o || 'di ni nyan thos kyi theg pa pa rnam skrag par byed pa'i rig pa ste | sangs rgyas nyid sgrub par byed pa ma yin no || sngags kyi sgrub pa 'ga' zhis gis sangs rgyas nyid sgrub par byed pa cung zad kyang med la | 'on kyang sgom pa'i rim pas yin no || **gsang ba'i tshul dang ldan pa'i sgom pa'i rim pa des** 'grub par 'gyur ro || lag na rdo rje des na 'jig rten pa dga' ba'i phyir dngos grub phra mo 'di sngags pas bsgrub par bya ste | sangs rgyas kyi phyir ma yin no ||

「以上のように説かれた諸修法をなす[べきである]。[マハーマーヤーという明呪を]常に念誦したならば、死に打ち勝つであろう。金剛手よ、これら[の諸修法]がマハーマーヤーという明呪を成就する方法を有して、まさにこの仕方によって、あらゆる世界を服従させるべきである。[ただし、]これ(マハーマーヤーという明呪)は、声聞乗の者たちを恐怖させる明呪であって、[真言行者が]仏の位を成就する[明呪]ではない。[すなわち、]

何らかの真言の成就によって、[真言行者が]仏の位を成就することは少しもない。しかし、[仏の位を成就するための]修習次第は存在する。以下の、**秘密の仕方を備えた修習次第**によって、[仏の位を]成就するべきである。金剛手よ、それ故に、世間の人々を喜ばせるために、この[マハーマーヤーの]簡易な成就を真言行者は成し遂げるのであって、仏の[位を成就する]ためではない。

以上のように、仏の位を成就するためには、「秘密の仕方を備えた修習次第」が必要であると説かれている。この文章の直後から⑤「五相成身観」が開始されることを根拠として、ここでの「秘密の仕方を備えた修習次第」とは、五相成身観のことを指していると判断することができる。つまり、**Guhyamañitilaka* における「五相成身観の目的」とは、仏の位を成就することである。

3. 五相成身観を行う状況

【問答 03】には、「五相成身観を行う状況」について、以下(D 146r1-3; P 108r5-8)のように記されている。

bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa |

lag na rdo rje 'di la mdzod ces bya ba ni bha ga'i gzhi'i gnas so || zhu ba can dang de'i mdzod gcig tu byas te | rdo rje sems dpa'i gzugs su bdag nyid bsam par bya'o ||

de nas bcom ldan 'das rnam par snang mdzad chen po lag na rdo rje dang | rdo rje gar ma dang | rdo rje sgeg mo dag dang thabs gcig⁸⁾ tu rnam pa du ma ā⁹⁾ ling ga dang | tsū¹⁰⁾ ṣa na la sogs pa mdzad cing bsten nas btung bar mdzad do ||

de nas lag na rdo rje sngags pa'i tshul 'di ltar tsū¹¹⁾ ṣa na dang | tsumba¹²⁾ na la sogs pas bha ga'i nang du song bar bya ste | bdag nyid rdo rje sems dpa'i gzugs su mngon par byang chub pa rnam pa lngas bskyed par bya'o ||

世尊はお答えになった。

「金剛手よ、ここにおいて、**藏**とは女陰の基部である。湿り気を持ったもの(精液)¹³⁾とその**藏**(女陰)とを一つにした後に、金剛薩埵の姿として自性を観想すべきである」

続けて、世尊である大毘盧遮那は、金剛手と金剛舞(ウマー)と金剛嬉(インドラ后)¹⁴⁾たちとともに、抱擁(ā ling ga; *āliṅga)と吸引(tsū ṣa na; *cūṣaṇa)などの各種の方法をなされつつ親近してから、飲ませた¹⁵⁾。

「さて、金剛手よ。真言の仕方、すなわち、吸引(tsū ṣa na; *cūṣaṇa)と接吻(tsumba na; *cumbana)などによって女陰の中に入った後に、自性を金剛薩埵の姿として、五相現等覚(五相成身観)によって生起せしめるべきである」

以上のように、「湿り気を持ったもの(精液)とその藏(女陰)とを一つにした後に」などと記されていることから、**Guhyamañitilaka* における五相成身観は、性交をしながら修習するものであると判断できる。

また、【問答 04】には、関連する内容が、以下(D 146r4-5; P 108v1-2)のように記されている。

bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa |

lag na rdo rje phyi¹⁶⁾ rol du gnas pa'am¹⁷⁾ | phyi rol gyi tshul gyis sam | bha ga bsten pa tsam gyis byang chub sgrub par nus pa ma yin te | 'on kyang sbyor ba 'dis gal te bha ga bsten na de ni mngon par byang chub pa rnam pa lnga sgom¹⁸⁾ pa por 'gyur ro ||

世尊はお答えになった。

「金剛手よ、[女陰の]外部に住することや、外部の仕方や、女陰を抛り所とすることのみによって、菩提を成就することはできないのである。

しかし、このヨーガによって、もし女陰を抛り所とするならば、彼(真言行者)は五相現等覚(五相成身観)を修習する者になるであろう」

以上のように、性交を行わない場合や、ただ単に性交を行うだけの場合には、五相成身観を修習することはできず、ヨーガを行いながら性交する必要があると記されている。なお、ここでのヨーガとは、【問答 09】における「さらに、

天の樓閣に住してから、吸引などのヨーガによって煌めく自性が見えたならば、それに基づいて速やかに成就すると知るべきである」¹⁹⁾という記述を根拠として、前掲した【問答 03】に記されていた「抱擁」、「吸引」、「接吻」などを指していると判断した。

また、**Guhyamanitilaka* におけるヨーガに関連して、【問答 09】の別の箇所には、ヨーガ、アティヨーガ(shin tu rnal 'byor; *atiyoga)、大秘密ヨーガ、秘密脈管ヨーガ、という四種類のヨーガの名称が列記されている²⁰⁾。ここで注目すべきは、後期密教の生起次第で実修される観想法である「四瑜伽」(ヨーガ、アヌヨーガ、アティヨーガ、マハーヨーガ)²¹⁾と、一部の名称が一致する点である。これに関しては、四種類のヨーガの内容が**Guhyamanitilaka* から後期密教経典へと整備・増広されていく過程で、ヨーガの名称が変化したと推測できる。

4. 五相成身観の内容

【五相成身観の説示】には、「五相成身観の内容」について、以下(D 146r5-7; P 108v2-4)のように記されている。なお、[1]通達菩提心、[2]修菩提心、[3]成金剛心、[4]証金剛身、[5]仏身円満、という五段階との対比を容易にするために、テキストと和訳には[1]~[5]という数字を付した。

[1]lag na rdo rje des rtsa'i zhu bas bdag nyid zla ba'i dkyil 'khor gyi rnam par blta bar bya'o || [2]yang byang chub zla ba'i tshul dang rtsa²²⁾ thams cad gcig tu byas te | bdag nyid byang chub zla bar bsgom par bya'o || [3]'o ma de las bdag nyid rdo rje'i gzugs su bsams la | de las yang rdo rje sems dpa'i skur rnam par bsgom par bya'o || [4]yang thams cad lhan cig gcig tu gyur pa las de bzhin gshegs pa thams cad kyi skur bsgom par bya'o || [5]de de bzhin gshegs pa thams cad kyi bdag po rnam par snang mdzad chen po dang mtshungs par 'gyur ro ||

「[1]金剛手よ、それによって、[すなわち]脈管の中の液体によって、自性を月輪の形と見なすべきである。[2]また、菩提の月²³⁾の形とすべての脈

管[の中の液体]²⁴⁾とを一つにした後に、自性を菩提の月として観想すべきである。[3]その乳白色(精液)から、自性を金剛杵の形として観想し、それ(金剛杵)からさらに金剛薩埵の姿を観想すべきである。[4]また、すべてが一体となってから、一切如来の姿を観想すべきである。[5]彼(真言行者)は、一切如来の尊主である大毘盧遮那と等しくなるであろう」

また、【問答 07】にも、[1]~[3]に関する内容が、以下(D 146v6-147r1; P 109r4-7)のように記されている。

[1]lag na rdo rje ji srid ba²⁵⁾ spu'i bu ga yod pa de srid la rtsa rnam rdul phra rab kyi gzugs su bsgom par bya'o || de nas rdo rje gar ma'i gzugs su bsgoms nas de'i bha ga'i dbus su rdo rje gar ma'i gzugs rtsa'i rang bzhin las a la sogs pa'i yi ge 'bab pa'i ngo bor bsam par bya'o || [2]de nas mi 'bab pa'i rtsa lnga ka la sogs pa'i gzugs su bsam par bya'o || de yongs su gyur pa las zla ba'i dkyil 'khor bsams la | [3]de'i 'o ma las bdag nyid bha ga'i dbus su rdo rje sems dpa'i skur bsgom par bya'o ||

「[1]金剛手よ、毛孔がある限り、[そこに存在する]諸々の脈管に微塵数の[尊格の]姿を観想すべきである。次に、金剛舞(ウマー)の姿を観想してから、その女陰の中に金剛舞(ウマー)の姿を[配置すべきである]。[すなわち]脈管の自性から、Aなどの文字を[女陰に]降り立つ自性として思念すべきである。[2]次に、[女陰に]降り立たない五つの脈管[の自性]を、KAなどの[文字の]形として思念すべきである。そこに完全に生じたもの(母音と子音の文字鬘)から、月輪を思念した後に、[3]その乳白色(精液)から自性を、[すなわち]女陰の中に金剛薩埵の姿を、観想すべきである。

以上のように、【五相成身観の説示】と【問答 07】の当該箇所においては、精液や女陰を用いることが明記されている。先述したように、**Guhyamanitilaka* では五相成身観を修習するにあたって、ヨーガを行いながら性交する必要があると規定されている。そのような規定が存在する要因の一つは、[3]に記されたように、女陰の中に放出した精液から金剛薩埵の姿を観想するというプロセスが存在するためであると判断できる。

5. 女性への親近の必要性

【問答 09】には、「女性への親近の必要性」について、以下(D 147r4-6; P 109v3-6)のように記されている。また、当該箇所には、[3]成金剛心の説明も含まれているため、テキストと和訳には[3]という数字を付した。

bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa |

sbyor ba dang ldan pa'i bud med bsten pa de ma gtogs pa gzhan gyis
sangs rgyas nyid thob par mi 'gyur te | gzhan thams cad ni rnam par
g-yeng ba yin no || lag na rdo rje de'i phyir sngags pas lha mo gang rnyed
pa de brla zung gi steng du bzhag²⁶⁾ la tsumba na²⁷⁾ dang | ā²⁸⁾ ling ga la
sogs pa byas te yongs su bsten pa | de nas 'thungs te de yang so sor
zhib²⁹⁾ tu gzhus go | [3]de nas bha ga'i dbus su rtsa de'i 'o ma bdag nyid
dang gcig tu byas la | rang gi sngags kyis rgyal pos bdag nyid 'dod pa yin
no zhes bsgoms te | rdo rje sems dpa'i sku dkar po'i rnam pa dang bar
bsgom par bya'o ||

世尊は答えになった。

「[私の状態を得られるのは]そのヨーガを備えた女性に親近する[仕方]だけであって、他[の仕方]によって私の状態は得られない。他のすべて[の仕方]は、[尊格の]姿に集中できないのである。金剛手よ、それ故に真言行者は、得られた女尊(ヨーガを備えた女性)を太腿を組んだ上に乗せた後に、接吻と抱擁などをなして、完全に親近すべきである。それから、飲ませて³⁰⁾、それ(男性器)をまた種々に細かく挿入すべきである。[3]それから、女陰の中で、その脈管の中の乳白色(精液)を自性と一つにして、[行者]自身の真言の王によって自性を欲するのであると観想した後、金剛薩埵の身体を清浄な白い姿として観想すべきである」

以上のように、「他のすべて[の仕方]は、[尊格の]姿に集中できないのである」と記されていることを根拠として、**Guhyamanītilaka*の五相成身観において女性に親近するのは、尊格の姿に集中するためであると判断できる。

また、当該箇所では、「精液を運ぶ脈管」の存在に言及されているが、この

脈管に固有の名称は付けられていない。これに対して、*Hevajratāntra*においては、田中[1997: 112]が指摘しているように、「精液を運ぶ脈管」にはララナー、「血液を運ぶ脈管」にはラサナー、「両者の混合物を運ぶ脈管」にはアヴァドゥーティー、という名称が付けられている。管見のおよぶ限りでは、**Guhyamanītilaka*の段階では、これらの並走する三脈管という概念は存在しない。

さらに、【問答 09】の別の箇所には、「女性への親近」に関連する内容が、以下(D 147v5-6; P 110r5-6)のように記されている。

lag na rdo rje des na tshul 'dis bud med bsgom pa na gal te rmi lam du
rdo rje sems dpa' dbang bskur³¹⁾ bar mdzad na de nas zla ba phyed tshun
chad du 'grub par shes par bya'o ||

「金剛手よ、それ故に、この仕方で[ヨーガを備えた]女性を観想する時、もし[その日の]夢において金剛薩埵が[行者自身に]灌頂をなされたならば、それに基づいて半月以内に成就すると知るべきである」

以上のように、「この仕方で[ヨーガを備えた]女性を観想する時」と記されていることを根拠として、**Guhyamanītilaka*の五相成身観における性的な修法は、観想において行うものであり、実際の女性パートナーを用いるものではないと判断することができる。

おわりに

本稿では、**Guhyamanītilaka*第三章における五相成身観について、「五相成身観の目的」、「五相成身観を行う状況」、「五相成身観の内容」、「女性への親近の必要性」といった四つの観点から考察を行った。

第一に、「五相成身観の目的」に関しては、仏の位を成就することであると説かれている。第二に、「五相成身観を行う状況」に関しては、性交をしながら修習すると規定されている。第三に、「五相成身観の内容」に関しては、時代的に先行する『真実撰経』や『金剛頂タントラ』には見られない特徴として、女陰の中に放出した精液から金剛薩埵の姿を観想するというプロセスが存在し

ている。第四に、「女性への親近の必要性」に関しては、尊格の姿に集中するためであると説かれている。

以上のように、**Guhyamañitilaka* 第三章における五相成身観には、性的な要素が顕著に見られる。当該の修法では、「四種類のヨーガ」や「精液を運ぶ脈管」にも言及されているが、*Hevajratantra* などと比較すると原初的な内容であり、後期密教経典の影響下に成立したとは考え難い。そのため、同経典における五相成身観は、中期密教から後期密教への過渡期における当該の修法の一形態であると判断できる。

略号表

conj.	conjecture(筆者が提案する読み。em. より蓋然度が低い)
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka(デルゲ版チベット大蔵経)
em.	emendation(筆者が想定する読み。conj. より蓋然度が高い)
n.	note(注記)
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka(北京版チベット大蔵経)
r	recto(写本・版本の表面)
v	verso(写本・版本の裏面)

参考文献

遠藤祐純

[1995]「瑜伽タントラについて——『総タントラ部解説』を中心に(3)——」、『大正大学研究紀要』80: pp. 260(1)-240(21).

[2016]『プトン造『総タントラ部解説“タントラ部なる宝の妙厳飾”という書』『瑜伽タントラの海に入る船』和訳』、ノンブル社。

倉西憲一

[2000]「*Kṛṣṇayāmāri tantra* における四瑜伽について——Kumāracandra の理解——」、『印度学仏教学研究』49(1): pp. 370(137)-368(139).

酒井真典

[1985]「五相成身観のチベット伝訳資料」、『酒井真典著作集』3、法蔵館: pp. 3-22.

高田仁覺

[1978]『インド・チベット真言密教の研究』、密教学術振興会。

田中公明

[1997]『性と死の密教』、春秋社。

徳重弘志

[2017]「『金剛頂経』第二・三会と第十一会の関連性について」、『密教学研究』49: pp. 51-63.

[2018a]「*Guhyamañitilaka* における「四種法」について——第四章の校訂テキストおよび和訳——」、『高野山大学密教文化研究所紀要』31: pp. 100(1)-83(18).

[2018b]「*Guhyamañitilaka* におけるマハーマーヤについて——第三章の校訂テキストおよび和訳——」、『高野山大学大学院紀要』17: pp. 35-58.

野口圭也

[1986]「Samputodbhavatantra と『秘密相経』」、『豊山学報』31: pp. 80(39)-56(63).

注

- 1) Cf. 酒井[1985], 野口[1986], 田中[1997: 40-49, 86-98].
- 2) Cf. 徳重[2018a: 84 n. 169].
- 3) Cf. 遠藤[1995: 243(18)], 遠藤[2016: 328-329]. また、同分タントラ(cha mthun)には、『理趣経』(D nos. 17, 489; P no. 121)や『金剛場莊嚴タントラ』(D no. 490; P no. 123)なども含まれている。なお、遠藤[1995]および遠藤[2016]では、cha mthun が「章タントラ」と訳されている。
- 4) 先述したように、プトゥンは**Guhyamañitilaka* をヨーガタントラ階梯に分類している。これに対して、高田[1978: 52-59]には、ツォンカパ(Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419)の高弟であるケードゥブ・ジェ(mKhas grub rje dGe legs dpal bzang, 1385-1438)の『タントラ類総論』に基づく密教経典の分類法が記されているが、そこでは**Guhyamañitilaka* はチャルヤータントラ階梯に分類されている。いずれにしても、チベットにおいては、**Guhyamañitilaka* はヨーガ・ウッタラタントラ階梯やヨーガ・ニルツラタントラ階梯には分類されていないようである。
- 5) **Guhyamañitilaka* 第三章の①と⑤における五相成身観の所在は、次の通りである。①(D 136r2-v6; P 97r6-98r3)、⑤(D 145v3-149r4; P 107v7-111v7)。
- 6) Cf. 徳重[2017: 55-57]. ただし、徳重[2017]の段階では、⑤にはマンダラが登場せず、真言も説かれていないことから、五相成身観とは異なる修法が行われていると誤認していた。この場を借りて、当該箇所では五相成身観が行われていると訂正させて頂きたい。
- 7) 当該箇所の校訂テキストおよび和訳は、徳重[2018b: 41, 44-45]から抜粋した。なお、煩雑になることを避けるため、当該箇所の異読や注記に関しては本稿では割愛した。
- 8) *gcig*] P; *cig* D
- 9) *ā*] D; *a* P
- 10) *tsū*] D; *cū* P
- 11) *tsū*] D; *tsu* P

- 12) *tumba*] em.; *tumpa* D; *tum pa* P
- 13) 「湿り気を持ったもの」(zhu ba can)に関しては、**Guhyamanitilaka* の別の箇所では、「その脈管の中の乳白色」(rtsa de'i'o ma)と言ひ換えられていることから、「精液」を意味すると判断した。
- 14) **Guhyamanitilaka* 第三章における③「降三世明王の因縁譚」では、「ウマー」の金剛名が「金剛舞」であり、「インドラ后」の金剛名が「金剛嬉」であると明示された上で、両者が大毘盧遮那如来の後として扱われている。詳細については、徳重[2018b: 48 n. 5]を参照されたい。
- 15) 何を飲ませたのかについては不明瞭であるが、甘露や酒や精液を想定していると推測できる。
- 16) *phyi*] D; *pha* P
- 17) *pa'am*] D; *pa'am* P
- 18) *lga sgom*] D; *la bsgom* P
- 19) **Guhyamanitilaka*: de nas lha'i gzhäl med khang du bsdad (*bsdad*] D; *sdad* P) nas tsü sha na la sogs pa'i sbyor bas bdag nyid 'bar ba mthong na de nas myur du 'grub par 'gyur bar shes par bya'o || (D 147v7; P 110r7-8).
- 20) **Guhyamanitilaka*: lag na rdo rje 'di ni rnal 'byor dang | shin tu (*tu*] D; *du* P) rnal 'byor dang | gsang chen dang | gsang ba'i rtsa'i sbyor ba dang bcas pa bya ba khyod (*khyod*] D; *khyed* P) la gsal bar byas kyes nga la bla ma'i yon byin cig | (D 148r7-v1; P 111r1).
- 21) Cf. 倉西[2000: 370(137)-369(138)].
- 22) *rtsa*] D; *rca* P
- 23) 田中[1997: 48]が指摘しているように、**Guhyamanitilaka* における五相成身観では、[1]と[2]でそれぞれ月輪が出現する。当該箇所では、その第二の月輪が「菩提の月」(byang chub zla ba)と呼称されている。
- 24) 【問答 09】(D 147r7-v3; P 109v7-110r3)に、諸々の脈管の中の液体が頭頂・胸・女陰に滴ることを観想すべきと記されていることを根拠として、語句を補った。
- 25) *ba*] em.; *pa* D P
- 26) *bzhag*] D; *gzhag* P
- 27) *tumba na*] em.; *tumba* D; *tum pa* P
- 28) *ā*] D; *a* P
- 29) *zhib*] conj.; 'jib D P
- 30) 先述したように、何を飲ませたのかについては不明瞭であるが、甘露や酒や精液を想定していると推測できる。
- 31) *bskur*] D; *skur* P

〈キーワード〉 *Guhyamanitilaka*、五相成身観、五相現等覚、pañcākārābhisambodhi-krama

ハタヨーガ批判について

松本恒爾

1. はじめに

Hevajratantra (以下 *HVT*) では、性的ヨーガの体験が、歓喜・最勝歓喜・離喜・俱生歓喜 ([prathama-]ānanda, paramānanda, vīramānanda, saḥajānanda) という四つの歓喜として整理されている。このいわゆる四歓喜は、それぞれの歓喜に対応する多様・異熟・破断・離相 ([vi]citra, [vi]pāka, vimarda, vilakṣaṇa) という四つの刹那 (kṣaṇa) とともに、それまで漠然としていた性的ヨーガの体験を体系化しようとする画期的な試みであった。

しかし、*HVT* の記述¹⁾ が確定的でなかったことから、その順序として次のような二種類の解釈が、後の密教者たち²⁾ によって主張されるようになったのである。

- ・ 解釈(A)：歓喜・多様→最勝歓喜・異熟→俱生歓喜・離相→離喜・離喜・破断
- ・ 解釈(B)：歓喜・多様→最勝歓喜・異熟→離喜・離喜・破断→俱生歓喜・離相

そして、このような二種類の四歓喜の順序の解釈をめぐって、Nāgārjuna による *Caturmādrāṅvaya* (以下 *CMA*)³⁾ では次のような批判が行われている。

「四つの歓喜とは歓喜、最勝歓喜、俱生歓喜、離喜・離喜 [という順序] である。さもなければ、『最勝 [歓喜] と離喜 [歓喜] の中間で目標を観察し、堅固にせよ』と言われていること、それが適当ではなくなってしまう。四刹那とは多様、異熟、離相、破断である。[異熟と破断の] 中間に離相を置き、灌頂で [目標が] 理解されるべきである。一方、ハタヨーガでは、俱生と離相の後に [目標の] 位置が理解されるべきである。灌頂とハタヨーガについ